

氏 名	いし い かず や 石 井 一 也
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 111 号
学位授与の日付	平 成 13 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 理 論 経 済 学 ・ 経 済 史 学 専 攻
学位論文題目	マハートマ・ガンディーの社会経済思想 ——開発論のテキストとして——

(主 査)
論文調査委員 教 授 本 山 美 彦 教 授 田 中 秀 夫 教 授 岩 本 武 和

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、マハートマ・ガンディーの社会経済思想を開発論のテキストとして概観したものである。その主目的は、同思想に対する過去の否定的な諸見解を批判的に検討する一方、シューマッハーなどのオルターナティブ開発思想との関連で、「近代」の次の時代の思考様式をガンディー思想の中に見出そうという点にある。

まず第一章では、ガンディーの生涯および独立運動の経過が辿られる。とりわけ彼が、独立運動の過程で、建設的プログラム（社会経済建設運動）をけっして放棄することのなかった事実によって、その社会経済思想が、政治思想・実践のそれと同等、あるいはそれ以上に重要であったことが明らかにされる。

第二章では、ガンディー思想に対するインド内外の諸宗教の影響が検討される。石井氏は、トルストイやラスキンらのキリスト教の影響が、ガンディーの諸活動に絶大な影響を与えていることを示すことによって、「非暴力」思想の形成によって外来宗教が「外発的契機」ととどまっていたとする古瀬恒介の見解を批判する。他方で、家庭内でのガンディーの家父長的姿勢に、「非暴力」思想の唱道者の人格的非一貫性を見出し、この原理によって人間を律してゆくことがいかに困難を極めたかを示している。

第三章では、ガンディーの近代文明批判と、彼がインドに構築しようとした「脱近代」の社会経済像を素描する。ここでは、あわせて彼の経済学およびマルクス主義批判が示され、これらのオルターナティブとしてチャルカー（手紡ぎ車）およびカーディー（手織り綿布）を中心とする独自の社会経済論が提示される。石井氏は、それを国家主義、懐古主義として批判したタゴールやロランの見解をも批判することによって、ガンディー思想の本質をいっそう明確に理解することに努めている。

第四章では、社会の富者が、その財産を神から信託（trust）された「受託者」（trustee）となって、これを貧者のために行使するという、受託者制度理論が検討される。マルクス＝レーニン主義者は、同理論をもってガンディー思想を「体制擁護」論と見なしてきたが、石井氏は、1920年代以降の同理論の展開をつぶさに追うことによって、それが「非暴力」の手法による社会経済改革理論であったことを論証している。

第五章では、建設的プログラムの実践が検討される。石井氏は、チャルカー運動の経済的効果がきわめて小さいものであったとする篠田隆の研究に反して、運動が一定の経済的効果を伴っていたことを論証するとともに、ガンディーが「近代」の利己心とは異なる原理で運営される社会の建設を目指していたことに積極的な意味を見出している。

第六章では、ガンディー死後の「ガンディー主義」が検討される。マルクス＝レーニン主義者らは、これを「ブルジョア政治の理論と実践」として否定的に捉えてきたが、石井氏は、ガンディーの後継者らの政治経済の運動が、常に民衆の心を惹き付けていたことを重視している。特にナーラーヤンの運動が、インディラ・ガンディーの独裁的政権を打倒したことに、独立インドが社会主義を標榜しつつ「世界最大の民主主義国家」たりえた所以を見出している。

第七章では、ガンディー社会経済思想が現代の開発思想へと継承される経緯が辿られる。石井氏は、ガンディーに発する

開発思想を、自由主義経済学やマルクス主義といった「近代」的思考とは異なる、オルターナティブな開発思想であると位置づけている。そうした開発思想が、現在でも世界の多くの NGO 活動の理論的支柱として生きている事実を踏まえ、それらが「脱近代」の社会経済のあり方を模索しているものと意義づけている。

終章では、アマルティア・センの「潜在能力」や「コミットメント」などの諸概念によって、ガンディー社会経済思想を現代の経済学の文脈で説明して論が結ばれている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、とかくガンディー思想の「非暴力」に焦点が当てられる傾向が強いなかで、その社会経済的側面を開発論の観点から吟味した画期的な研究である。

より具体的には、第一に、これまでガンディー思想を、国家主義、懐古主義、復古体制と規定してきた諸通説を覆し、同思想からインターナショナリズム、持続的発展、社会経済改革論などの要素を引き出すことによって、これを次の時代を担う思想の一つとして新たに捉えなおしている点が、斬新である。

第二に、イギリス古典派経済学のなかから、帝国主義思想が現出した経緯を考えると、ガンディー思想を、支配を受けたインドの側から西欧による非西欧支配を内に抱えた近代文明を批判した思想として位置づけている点は、経済学そのものが近代史のなかで果たした役割を相対視する意味でもきわめて重要である。

第三に、石井氏は、ガンディーの受託者制度理論を建設的プログラムとの関連で理解することによって、前者を積極的な社会経済改革論と見なしているが、ここにマルクス＝レーニン主義者たちによってつくられた「体制擁護」論的通説から脱却する試みは成功している。このような視点は、おそらく冷戦構造の崩壊後においてようやく可能となったものであり、ここに同理論の常識を塗り替えたことは、重要な学問的貢献である。

第四に、ガンディーの指導した建設的プログラムについての石井氏の評価である。同氏は、チャルカー運動の経済的効果が極めて小さなものであったと結論する篠田隆氏の研究を乗り越えようと試み、それに成功している。基本的に篠田氏のものと同じ一次資料を用いながら、篠田氏の論理の組み立て方を綿密に吟味し、その見解が運動に対する過小評価であることを論証している。運動が、一定の実体を伴って進行したプロセスであったことを示している点で意義深く、既に定着した批判的見解を打ち消し、新たな像を提示しえたことは、高く評価されてよい。

しかしながら、いくつかの課題が残る。第一に、ガンディーの私生活において、その人格的一貫性を疑問視するのはよいとしても、ではいったいこの論点は全体の議論といかなる関連性をもつのかがいまひとつ明確ではない。ガンディー思想のより確かな理解のためにも、論理をいっそう深める余地があるといえる。

第二に、本論文が、開発論といういわば一般論の文脈のなかでガンディー思想を扱ったとしても、カースト制度や不可触民制度などは、インドの特殊事情として、議論の主要な対象から外してよいものであろうか。ガンディーが常に不可触民階層の救済を念頭にいていたのだとすれば、ガンディーの社会経済思想の重要な構成部分として、ガンディーと不可触民階級出身のビムラオ・アンベードカルとの論争が含まれてもよい。

第三に、同様にインドの特殊事情として、ヒンドゥー＝ムスリムの宗派間対立（コミュニナリズム）の問題がある。第一章や第三章で述べられているように、チャルカーにコミュニナリズムを調整する役割が与えられていたのだとすれば、印パ分離独立へと至るまで激しく行われたガンディーとムハンマド・ジンナーとの論争も、議論の重要な構成部分となりうる。

このように、今後の課題が残されているとはいえ、ガンディー社会経済思想の基本的枠組みを提示し、これを開発論の文脈で再評価する試みは、総じて成功している。今後の課題として考えられる諸点についても、多くはそのような基本的枠組みが設定されてはじめて可能なものである。

本論文が、諸資料の綿密な検討をふまえた上で、ガンディー思想に関する新しい見解を提示したことは事実であり、この点において、ガンディー研究および開発論の水準を大きく引き上げたことは認められてよい。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成13年4月2日、論文内容と、それに関連した試問を行った結果、合格と認めた。